

< 論文 >

教職の特性と教師の「心の病」に関する研究
— 「教師＝生徒関係」への理想と現実の差異に着目して —

越 智 康 詞 信州大学教育学部学校教育講座
志 波 利 香 信州大学教育学部教育実践科学

Study on the Mental-health of the Teacher

From the Viewpoint of the Traits of Relationship between the Teacher and Students

OCHI Yasushi: Department of Education, Faculty of Education, Shinshu University

SHIBA Rika: Training Course for Elementary School Teachers, Shinshu University

The aim of this paper is to examine the cause of the “burnout” of the teacher from the viewpoint of the traits of the relationship between teachers and students in reconsidering Japanese school system. Japanese teachers tend to depend too much on the ideal relationship between teachers and students. It is true that this ideal has had a good influence on teachers’ mental-health, but recently it has been found to have bad influence on it, because children have radically changed their values and they don’t necessarily share the same ideal relationship between teachers and student with the teacher. It has become necessary to review and reform the role and situation of the teacher by considering the mental attitudes and values of students of today.

【キーワード】 教師の「心の病」 教師＝生徒関係への理想 子どもの変化

1. 問題設定

今日、教師の中ではストレスなどによる「心の病」を煩い、バーンアウト（燃え尽き症候群）といわれる状態に陥っている者が増加している。その結果、不登校となったり、休職を余儀なくされる教師も多いという。文部省のまとめによると、養護学校も含めた公立の小・中・高校の教師のうち、3ヵ月を越えて病気休職をしている教師の数は3,791人で、うちうつ病や神経症など精神疾患による休職者は、1,385（1996年度）で、その割合は年を追って伸びている。¹

本研究は、長野県の小・中学校の教師を対象にメンタルヘルスに関する調査を行い、教職のいかなる条件が「精神的な疲れや徒労感」の要因となっているのかを探ることを目的としている。「心の病」やバーンアウトなどの現象は、さまざまな要素が複合して生じるも

のであり、多様な観点からの分析が必要である。ⁱⁱしかし、本稿では「子どもとの関係」に焦点をあて、その背景的要因を探ることを目的とする。ⁱⁱⁱその理由は以下の通りである。

「バーンアウト（燃え尽き症候群）」とは、もともと医者、看護婦、カウンセラー、ソーシャルワーカーといった、いわゆる対人サービスに従事する専門職に共通して見いだされる職業病である。つまり、バーンアウトは、単に客観的な職務の多忙さやストレスの多さによって生じるものというよりは、対人サービス(クライアントとの関係や規範)に含まれる職務の特性に深く関連した現象であり、その意味で教師のバーンアウト現象も、クライアントである子どもとの関係を中心に検討する必要がある。

もちろん、対人サービスの職務が、常に一律にバーンアウトと結びつくわけではない。パインズ尺度を用いたある調査報告によると、日本の場合、医師16.0%に対して、看護婦31.7%、教師41.2%と、医師よりも看護婦や教師にバーンアウト的症状を呈する者の比率が高い(松浦 1999)。客観的に見れば、医師は人の生命に関わる厳しくかつ重大な責任を負ったハードな職務であるが、バーンアウトに陥る者の割合は、医師よりも看護婦、看護婦よりも教師においてより高いのである。^{iv}このことが示唆するのは、職務自体の厳しさ・複雑さや、クライアントに対する責任の大きさとといった客観的条件以上に、クライアントとの関係の特質、あるいはその関係を取り巻く制度的・意味論的文脈の在り方がバーンアウトの発生にとってより大きな意味を持っているということなのである。

本調査を導く仮説は次のとおりである。日本において「教師」とは職務内容により定義される職業カテゴリーである以上に高度に人間化・規範化された期待を内包する役割＝人格カテゴリーである。「教師」という役割＝人格に求められる責任・期待は無際限(エンドレス)という特徴をもつ一方、教職に対する評価基準は曖昧で、結果よりもプロセスを、特に子どもの現実が二者関係の理想にどのくらい一致しているかを「鏡」として、評価＝自己確認が行われる構造を持つ。要するに、①教師とはそのアイデンティティや達成感・満足感を子どもの状態や子どもの反応に依存する度合いが著しく高い職業なのである。さらに、こうした条件に加えて、日本の教師は、②職務への指示や規制及び多忙さによって、職務遂行上の自由度やゆとりが限定され、およそ人間的な理想に基づいて実践を行っているという実感はもちにくく、さらに③今日では、子どもの価値観や性向も多様化し、教師は教師＝生徒関係についての理想や物語を子どもたちと共有することが難しくなっている。バーンアウト現象を始めとする教師の精神的なストレスや疾患の背景には、こうした二重のギャップ(①と②、①と③)が存在しているのである。

2. 調査の概要

調査の概要は以下の通りである。^v

- (1) 調査対象：長野県内の公立小・中学校の教師(校長・教頭の管理職は除く)
- (2) 調査方法：小・中学校の教師500人を無作為抽出。郵送による自記式質問紙法
- (3) 調査時期：平成11年10～11月
- (4) 回収率55%(有効サンプル数 275/500)

(5) サンプルの内訳：性別 男性 174人(64.9%)、女性 94人(35.1%)
 学校種 小学校142人(51.6%)、中学校132人(48.0%)

3. 調査結果と分析

「精神的な疲れや疲労感」を感じている教師は、実際、どのくらいの割合にのぼるのか。表1は、「仕事をしていて精神的な疲れや疲労感を感じるがありますか」という質問に、「よくある」「時々ある」「めったにない」「全くない」の4段階で回答を求めたものである。4割近くの教師が「よくある」と答えており、「時々ある」も含めると、約9割の教師が「精神的な疲れや徒労感」を感じていることがわかる。こうした疲れや徒労感の背後には、いかなる教職の特性が関与しているのだろうか。

表1 仕事をしていて精神的な疲れや徒労感を感じるがありますか

	よくある	時々ある	めったにない	全くない	全体
人数	106人	141人	26人	2人	275人
割合	38.5%	51.3%	9.5%	0.7%	100%

本調査では、第一に教師の抱く「教師＝生徒関係への理想」を調べ、そうした「理想」が「精神的な疲れや徒労感」にとって、どのような機能をもっているのか、を調べる。ここでは、プラスに作用する場合とマイナスに作用する場合の「条件」が示されるだろう。第二に、本調査では、教師が子どもたちの現実をどのように感じているのかを調べ、そうした「教師の子どもたちの現状への認識」と「精神的な疲れや徒労感」との関係を調べる。こうした検討を通して、①教師が教師＝生徒関係への理想に依存し、これをアイデンティティの中核に据える度合いが高く、かつ、②教師＝生徒関係の理想と現実のギャップが大きいことが、「精神的な疲れや徒労感」の要因となっている、という仮説を検証する。

教師は子どもとの関係において、どのような理想や期待を抱いているのか。表2は、教師に「子どもとの関係」に対する理想を聞いたものである。

表2

質問項目	肯定的回答率	有効回答数
A. 教師と子どもの関係は何でも話せる友人のようであるべきだ	55.3%	275人
B. 教師は権威を失ってはならない	78.4%	273人
C. 子どもから嫌われても教師としての姿勢を保つべきである	73.6% (81.1%)	273人 (132人)
D. 子どもたちから頼られる教師でありたい	96.3%	275人

ただし()内は中学校教師

まず、ここから「教師と子どもの関係は何でも話せる友人のようであるべきだ」という

質問に対して、半数を越える教師（55%）が、肯定的に答えていることがわかる。もちろん、この55%という数字は、逆にいえば「友人関係」を理想とすることに対して半数近くの教師が否定的な見解を持っている、ということを示している。

では、「教師は権威を失ってはならない」という項目はどうだろうか。この質問に対し約77%の教師が肯定的に答えている。また、「子どもから嫌われても教師としての姿勢を保つべきである」という質問に対しても74%の教師が肯定的に答えており、「教師は生徒に対し友人関係を結ぶよりも、権威や姿勢の一貫性を保つべきである」と考える教師のほうが多数派であることがわかる。

ところで、教師＝生徒関係は「友人関係」であるべきか「権威的關係」であるべきかをめぐる論争がある。教育内在的な議論は別として、確かに、子どもと「友人関係」を結ぶことを理想とし、かつ実際にも子どもとの間に良好な関係を結べた教師は、子どもとの相互作用を通して高度な達成感を味わうことができるだろう。だが、ここには問題も存在する。教師が生徒と「友人的関係」を維持しようとする、生徒の態度や感情への依存度が高まり、教師としての一貫した姿勢を維持することが難しくなる。じっさい、権威の確立を重視する教師の中には、子どもの感情や状態に流されることなく、安定した職務の遂行が重要であるという立場から「友人関係」への理想を批判する者が多い。^{vi} 勤続年数が長くなるほど「友人関係」を理想とする教師の割合が減少するという本調査の結果からも、この点は納得できる。^{vii} しかしながら、「教師としての権威を保つ」ことも、ある意味で子どもからの権威の「承認」を前提としてはじめて可能になるものだということを忘れてはならない。権威を求める教師も、子どもからの評価に依存しているのであり、彼らのまなざしや状態から完全に自律性を確保しているわけではないのである。じっさい、ほとんどの教師（96%）が、「子どもに頼られる」ことを願い、子どものまなざしや態度にその存在の確からしさを依存しているのである。

そこで次に、教師の抱くこうした「子ども関係への理想」は、教師の教職への意欲やアイデンティティの維持にどのような機能を持つのか調べてみる。表3は、「仕事をしていて精神的な疲れや徒労感を感じることもあるか」という質問と、「授業時間以外に子どもたちと接する機会が多い」という質問とのクロスである。これを見ると、子どもと接する機会が多い教師ほど、「精神的な疲れや疲労感」を感じる事が少ないことがわかる。

表3 子どもたちと接する機会の多さと精神的な疲れや徒労感の相関

質問項目	授業時間以外に子どもたちと接する機会が多い		
		そう思う	そうは思わない
仕事をしていて精神的な疲れや徒労感を感じることがありますか	「よくある」	65人 32.0%	41人 57.8%
	「時々ある」「めったにない」「全くない」	138人 68.0%	30人 42.2%
	合計	100.0%	100.0%

P < 0.05

また、表4は「精神的な疲れや徒労感」と「子どもたちは心の支えである」とのクロスであるが、ここから「子どもを支え」と考える教師ほど、「精神的な疲れや徒労感」を感じる事が少ない、ということもわかる。これらのデータからわれわれは、子どもと良好な関係を結び、また子どもとの関係を自己のアイデンティティの根幹に据えることがいかに教師にとって大きな精神的報酬の源泉となるのかを知ることができる。

表4 子どもたちを心の支えとすることと精神的な疲れや徒労感の相関

質問項目	子どもたちは心の支えである		
		そう思う	そうは思わない
仕事をしていて精神的な疲れや徒労感を感じることがありますか	「よくある」	68人 33.3%	38人 54.3%
	「時々ある」「めったにない」「全くない」	136人 66.7%	32人 45.7%
	合計	100.0%	100.0%

P<0.05

しかし、教師は、常に子どもとの関係から報酬を受け取ることができるわけではない。教師＝生徒関係への理想が「精神的な報酬」という利益を生むのは、子どもが教師と互いの関係のあり方に対する理想や物語を共有する場合、すなわち、子どもたちが物語に沿った関係づくりに共同で参画し、教師の期待にこたえる場合に限られる。^{viii} これは、友人関係への理想であれ、権威的関係への理想であれ、同じである。これに対し、教師と生徒のどちらかが一方的に高い期待を抱いたり、両者の理想の間にミスマッチがある場合、そこにはさまざまなトラブルが発生することになるだろう。だが、教師にとってそれ以上に耐えがたいのは、関係そのものを拒否する子どもたちの出現である。じっさい、8割を超える教師が「子どもの反応がないと不安になる」と答え、子どもの「関係からの撤退」を怖れている。また、「教師として「無力感」や「困難さ」を最も感じるときはどのようなときか」という質問への回答（自由記述）からも「教師が支えとなって子どもが成長する」といった物語を共同構築できないケースへの不安の強さを伺い知ることができる。

生徒と人間関係がうまくいかないとき(20代・男)、子どもたちと距離を感じる時、(40代・女)、子供の育ちが見られないとき(30代・男 40代・男)、自分の考えた授業方法で授業をやったときそれが子供たちにとって生かされていないとき(40代・男)、自分の力の無さを感じたとき(40代・女)、指導力のなさを感じる時(30代・男)、何の力にもなれない時(30代・男)ところで、表5は教師が現代の子どもたちの現実をどう見ているかを示したものであるが、これらのデータは「本当は素直な生徒」「教師との関係に熱い思いをよせる生徒」といった教師が生徒に対して求める一般的な期待(=理想の物語)が、もはや過去のものとなってしまったことを告げている。「子どもたちは教師の前では自分を隠している」、「最近の子どもは何を考え、求めているのかわからない」と感じる教師は半数を越えており、約3分の1の教師が「今の子どもたちは教師との関係を冷めた目で見ている」と感じている。小学校よりも中学校において、こうした教師ばなれの傾向はより顕著である。また、

7割を超える教師が「授業中や指導場面で自分の思いが通じないと思うことがある」と答えていることからわかるように、教師の権威を解体する動きも確実に進行している。

表5

質問項目	肯定的回答率	有効回答数
A.子どもたちは教師の前では自分を隠している	53.9% (66.1%)	265人 (127人)
B.最近の子どもたちは何を考え、求めているのかよく分からない	46.9% (59.2%)	272人 (130人)
C.今の子どもたちは教師との関係を冷めた目で見ていると思う	32.6% (43.5%)	270人 (131人)
D.授業中や指導場面で自分の思いが通じないと思うことがある	72.2%	273人
E.子どもの反応がないと不安になる	80.9%	273人
F.子どもたちの反応や発言に教師としての自信を失うことがある	44.3%	273人
G.子どもたちから嫌われないように子どもたちの顔をうかがっている	23.9%	272人

ただし（ ）内は中学校教師の回答

そして、注目すべきことに「子どもたちの冷めた目」や、「子どもたちの反応や発言」の厳しさは、教師の「精神的な疲れや徒労感」と高い相関がある。(表6 表7)

表6 子どもたちの冷めた目と精神的な疲れや徒労感の相関

質問項目	今の子どもたちは教師との関係を冷めた目で見ていると思う		
	そう思う	そう思わない	
仕事をしていて精神的な疲れや徒労感を感じることがありますか	「よくある」	48人 54.5%	55人 30.2%
	「時々ある」「めったにない」「全くない」	40人 45.5%	127人 69.8%
	合計	100.0%	100.0%

P<0.05

表7 子どもたちへの自信喪失と精神的な疲れや徒労感との相関

	子どもたちの反応や発言に教師としての自信を失うことがある		
	そう思う	そう思わない	
仕事をしていて精神的な疲れや徒労感を感じることがありますか	「よくある」	66人 54.5%	40人 26.1%
	「時々ある」「めったにない」「全くない」	55人 45.5%	113人 73.9%
	合計	100.0%	100.0%

P<0.05

ところで、もしも「子どもとの関係を友人関係に求めたい」という希望が自己成就するのであれば、理想を持ち、子どもを信じ、子どもとの信頼関係に尽くすことはそれ自身が問題の有力な解決策となる。実際、さまざまな実践報告は、そうした教育関係への信念が、数々の難局を成功へと導いてきたことを示している。¹⁸ところが、われわれは「子どもとの関係」にある特定の理想を求めれば求めるほど、かえって期待と現実認識とのギャップを広げてしまうという、一種の悪循環の構造があるという事実にも目を向けておかなければならない。たとえば、表8に見るように、「子どもとの理想の関係は友人関係だ」と考える教師は、かえって子どもの冷めた目を意識することになりやすいのである。

表8 友人関係を求める教師と子どもたちは冷めていると思う教師の相関

質問項目	教師と子どもとの関係は 何でも話せる友人関係のようであるべきだ		
		そう思う	そうは思わない
今の子どもたちは 教師との関係を 冷めた目で見てい ると思う	そう思う	57人 38.0%	31人 25.8%
	そうは思わない	93人 62.0%	89人 74.2%
	合計	100.0%	100.0%

P<0.05

権威を求める教師にも同様の陥穽がある。表9は権威を重視する教師と子どもたちの顔色を伺う教師の関連を調べたものであるが、「教師は権威を失ってはならない」と考える教師ほど、逆説的にも、「子どもたちから嫌われないように、子どもの顔色をうかがう」傾向が高くなるのである。

表9 権威に固執する教師と子どもたちの顔色をうかがう教師の相関

質問項目	教師は権威を失ってはならない		
		そう思う	そうは思わない
子どもたちから嫌 われないように、 子どもたちの顔色 をうかがっている	そう思う	57人 26.8%	7人 11.9%
	そうは思わない	156人 73.2%	52人 88.1%
	合計	100.0%	100.0%

P<0.05

また、数字は省略するが、子どもたちが何を考え、何を求めているか理解できないと感じている教師ほど、教師としての指導の姿勢を保ち、権威を保とうとする傾向があることも明らかとなった。彼らにとって権威は、職務遂行の自律性を確保する正当な装置というよりも、日々の安全を確保するための自己防衛の手段（隠れ蓑）でしかないのである。

4. 結論

日本では、教師に期待し、疎外され、反抗する生徒は、しばしば話題になる。これに対して、教師が生徒の期待にこたえる立派な人格者であることは暗黙の前提として議論が行

われてきた。だが、実を言うと教師も、その達成感やアイデンティティを生徒からの承認や反応に依存する不安定な存在である。友人のような関係を理想とするにせよ、権威の確立を理想とするにせよ、理想を共有する生徒とのふれあいや、「最終的には分かり合える」といった物語の協同構築を通して、教師はまさに「教師」でありえたのである。ところが、現在、こうした教師と生徒の蜜月関係は崩れつつある。生徒を「鏡」として構成される教師のアイデンティティ構造は、「冷めた目」を持ち、「何を考えているかわから」ず、「反応がない」といった、およそ「理想」と異なる生徒を前にする時、かえって「精神的な疲れや徒労感」を増幅する抑圧装置にもなりかねない。「理想的な生徒（教師＝生徒関係）」を前提としたシステムから、多様化した子どもたちの現実に合わせてシステムへと学校を再生していくことは、教師の精神衛生という観点からみても不可欠なのである。

5. 考察

本稿では、日本の教師の対生徒関係(物語)への依存性が、子どもの現実を媒介として、一方で教育実践や教師のアイデンティティを支えると同時に、他方でバーンアウトなど教師の「心の病」の要因ともなっていることが示唆された。だが、こうした知見をもとに、教職をどのように構想していけばよいのか。

まず、ここからただちに反対の結論、すなわち教職を対生徒関係から分化・独立させればよい、という結論を導くのは危険である。教師が子どもから超越した立場に立ち、これに無関与になろうとすることは、教育の臨床的・過程的性格を抑圧し、教師が実践のプロセスや子どもの多様な現実から学ぶ機会（現実とのフィードバック作用）を消滅させてしまうことになる。さらに、こうした専門的独立へ向かう方法の持つデメリットについては、学校職務の専門分化の進んだアメリカで、教師のプロレタリアライゼーション（専門技術者）化が進行し、さまざまな弊害(教職人気の低迷など)を生んでいることを考えると、より深く納得できるだろう（Apple,1988）。

とはいえ、学校を取り囲む社会環境も、子どもたち自身の価値観も多様化し、子どもとの「理想的関係」に依存する教師はかえって不適応になる、という現実を前にして、過度に人格主義的な色彩を帯びた教職の構造をこのまま放置しておくこともできない。では、どうすればよいのか。ひとつ確かなことは、一方で教師は生徒の現実に深く関与しつつも、他方でそこから相対的な自律性を確保するという両面性を確立する必要がある、ということである。これは確かに容易なことではない。だが、決して不可能なことでもない。

ここではその方策として、ふたつの可能性を指摘しておく。⁵ ひとつは、教職の使命＝根拠をどのように設定するかという問題である。国家への奉仕を教職の意義とした戦前の教育は、一方で教師が「子どもとの関係」に左右されることなく、一貫した教育を行うことを可能にしてきたが、他方で子どもを対象物化し、教師が子どもから学ぶ可能性を阻害してきた。現在、教職の使命を子どもへの奉仕とする動きがあるが、逆にこの理想は子どもとの間の適度な距離を確保することを難しくする。それというのも、ここでいう「子どもへの奉仕」とは、その者の人権の尊重や尊厳への配慮ではなく、「子どもの感情を損な

わない」といった多分に情緒的な内容に基づくものだからである。これに対し、子どもの人権・教育権を守り、市民的实践力を保障することで民主主義社会の正義を維持するといった、半ば公共化された使命を抛り所とし、さらには開かれた専門的な倫理・知識・技術、協同的な同僚関係をその実践への「支え」や「鏡」とすることで、子どものために、過度に子どもの状況や気分左右されることなく、より長期的観点に立ちながら、その実践を進めていくことが可能となるだろう。

ふたつめは、子ども（クライアント）との関係の構築・反省能力それ自体を専門能力の一部として加えること、あるいは絶えざる子どもや環境からの要望や問題提起にその専門性を開くことである。「教育分析（分析者自身の分析）」や「転移関係（関係自体の分析）」を治療関係＝治療技術の中に組み込んだ精神分析やカウンセリングのシステムは、そのひとつのモデルとなりうるだろう。「隠れたカリキュラム」という概念が示すように、教育においては教師＝生徒関係（権威の形態や愛情の表現の仕方、さらには相互作用のプロセスなど）は、よい方向にも悪い方向にも極めて大きな影響力を持っている。こうした現実を鑑みると、関係の構築能力や関係への批判的分析力を教師個人の人格能力として神秘化せず、教職の専門能力及び倫理として全ての教師に共有させ、これを共に発展させていくことがいかに重要な事柄であるかがよくわかるだろう。

現在、教師の「心の病」が深刻な社会問題となりつつある。確かに、この問題の解決を急ぐことは重要である。だが、教師の「心の病」の問題は「教職への不適応」といった小さな枠に押し込められるべき問題ではない。わたしたちは、教師の「心の病」の問題を、学校システム全体にかかわる重要な問題提起として、特に、学校や子ども問題を教師の責任に帰属することに終始するわたしたちの教育的思考システム（言説）の閉鎖性に警鐘をならす問題提起として受け止める必要があるのである。

ⁱ 教師の「心の病」の深刻さは、電話による健康相談の利用状況からも伺い知ることができる。24時間体制で電話による健康相談を行っている民間企業ティーベック（本社・東京）によると、1997年4～7月では、教師の健康相談のうち、メンタルヘルスに関するものが全体の17%を占め、一般企業で働く人の2倍であった。

ⁱⁱ 教師の「心の病」と職場環境の関連というより広い観点からの分析は山口恒夫(2000)参照。ストレスという観点から要因分析を行ったものとして秦(1991)などがあり、教職への不適応としては松本(1994)がある。

ⁱⁱⁱ 教師のメンタルヘルスに関する調査において、教師と児童・生徒との関係に焦点をあてたものとして、山口正三他(1997)は教師と生徒の心理的距離の「現状」と「理想」に視点をおき、そのズレや心理的距離の変容にかかわる要因を研究している。後藤他(1996)は教師の勤務の現状と意識の実態を把握する1つの視点として学習・学級経営面の不安について報告している。しかしながら、いずれも教師自身が児童・生徒との関係をどのように認識し、どのような思いを抱いているかについては明かではない。

^{iv} この点は、土居(1988)などの結果でも同様である。

^v 本調査の概要や内容の詳細については山口(2000)参照。

^{vi} たとえば諏訪(1990)などプロ教師の会はこの立場である。

^{vii} 勤続年数別のデータを挙げておく。

質 問 項 目	勤続 10 年未満	勤続 10 年以上
A.教師と子どもの関係は何でも話せる友人関係のようであるべきだ	66.7%	47.9%
B.子どもたちから嫌われても注意することをためらわない	76.9%	86.8%
C.子どもたちの反応がないと不安になる	88.6%	76.0%
D.子どもたちから嫌われないように顔をうかがっている	30.5%	19.8%
E.子どもたちの反応や発言に教師としての自信を失うことがある	53.5%	38.7%

*ただし数字は「とても思う」「少し思う」に答えた人数の割合

viii たとえば人気番組の「3年B組金八先生」のように、非行少年が教師の熱意に感動し、その期待にこたえて立派な人間になる、といったストーリーを教師も子どもも共有し、かつこれが満たされると、教師も子どもも共に感動できるのである。だが、こうしたストーリーの一方的な強調は、そこから疎外された子ども（教師）を輩出することになる。

ix たいていの実践報告や教育物語は（最終的に見れば）成功例である。そして、ここで成功というのは、物語（マスター・コード）の成就ということに他ならない。つまり、実践報告とは、ある意味で物語の再生産装置なのである。

x この点についての詳細な議論は、越智（2000）を参照。

【参考文献】

- 土井健郎監修 1988年『燃えつき症候群—医師・看護婦・教師のメンタル・ヘルス—』金剛出版
- 後藤靖宏・田中妙 1996年「教師の職務の現況とストレスの問題」『大分大学教育学部研究紀要』19(1) 215-230 ページ
- 松浦義満 1999年「疲弊する教師たち—多忙化と「荒れ」のなかで」『教師の現在 教職の未来』油布佐和子編 16-31 ページ
- 松本良夫 1994年「教職への『不適応』を考える」『逆風のなかの教師たち』松本良夫・河上婦志子編 177-200 ページ
- Michael W. Apple, 1988, *Teachers and Texts: A Political Economy of Class and Gender Relations in Education*, New York: Routledge.
- 越智康詞（2000年刊行予定）『「制度改革」のなかの教師—教育の専門性・公共性・臨床性の確立に向けて』『《教師》という仕事（ワーク）』永井・古賀編
- 秦政春 1991年「教師のストレス—「教育ストレス」に関する調査研究—」『福岡大学紀要』第40号 第4分冊 79-146 ページ
- 山口正二・斎藤直文・徳永桂一・田上不二夫 1997年「生徒と教師の心理的距離の変容に関する研究—現状と理想のずれの視点より—」『教育相談研究』35巻 33-42 ページ
- 山口恒夫・後藤祐貴子・山口美和（2000年）「教師の『心の病』と職場の人間関係」『教育実践研究』信州大学教育学部附属教育実践総合センター 創刊号

（2000年3月31日 受付）

（2000年5月21日 受理）